

☆回 想……

も く じ

私の卓球人生	諸星 光雄 …… 75
ふくしま国体の思い出	河野 歌子 …… 77
「第50回ふくしま国体審判員」——思い出と苦勞——	小林 文子 …… 77
「第50回ふくしま国体審判員」としての思い出	佐藤アヤ子 …… 78
「第50回ふくしま国体審判員」の思い出 ——2級審判員資格の尊さ——	菊地 久子 …… 78
「第50回ふくしま国体審判員」を経験して	津島 佳子 …… 79
ふくしま国体の思い出	小野田純子 …… 80
私のふるさと	藤田 由稀 …… 80
思い出	増田 淳子 …… 81
「第50回ふくしま国体審判員」の想い出	西片美代子 …… 81
国体出場の想い出	反畑 秀彦 …… 82
ピンポンから卓球へ	井上 六郎 …… 83
卓球に魅せられて	斎藤恵美子 …… 84
私と卓球	田辺ふみ子 (旧姓 佐藤) …… 84
「第50回ふくしま国体審判員」	横山 正子 …… 85
「喜多方高校卓球OB会創立30周年を迎えて」	五十嵐修二 …… 86
ふくしま国体の想い出	生井 一弥 …… 86
東京選手権サーティの部優勝を果たして	原 晃 …… 87
卓球と出会って31年	大和田元一 …… 87
「ふくしま国体」の審判員を務めて	河村 朝子 …… 88
ふくしま国体と私	大越 守 …… 88
私の思い出	岡田 晶子 …… 89
卓球生活の回想	福島 正子 (旧姓 尾形) …… 90
私の卓球人生の中での忘れられない中国遠征	佐々木トシ子 (旧姓 橋本) …… 90
卓球と協会との出会い	大嶋 克子 …… 91
大会参加の想い出	松本 厚子 (旧姓 奥村) …… 92
卓球は不滅	橋本 義一 …… 93
卓球を通じて出会った人々	根本 裕子 (旧姓 佐藤) …… 94
学長にほめられて	伊藤 二郎 …… 94
団体準優勝 単・複 優勝成る	高橋 敏夫 …… 95
青春時代	片桐 寛 (旧姓 日下) …… 96
魅せられて	田中 滋子 (旧姓 猪瀬) …… 97

私の卓球人生

諸 星 光 雄



私の卓球の始まりは昭和28年（中学2年生）の時で、入部の遅い私は中学時代は補欠選手でした。中村第一中学校は森口先生の指導のもとに相双地区ではつねに上位の成績のようでした。中学も3年生の夏休みが終わると大きな試合もなく高校進学に向け休部になりますが、卓球が面白くなって来た私は、下級生に混じって卒業式を迎えるまでやり通し、相馬高卓球部に希望を抱いていました。

当時は一般家庭ではお金も自由になりませんでしたし、汽車に乗る機会も少なく、行動半径も狭く、卓球の情報も入って来ない状況でした。高校入学後、解ったことは相馬高校の卓球部は伝統があって、当時の3年生は梅原・佐原（兄）・佐藤・早川・亀田と2年生の佐原（弟）が居られ県では強い卓球部でした。当然1年生の時は補欠にも入れず遠征には行くことも出来ませんでした。

少ない情報の中で相双地区には大人の方できれいなフォームで卓球をしていた鈴木・半谷さん・高校生では同じ小高地区の草野・藤井・藤が近隣にいました。

1年生の夏が過ぎ3年生は試合がなくなり進学勉強に入り、上手な上級生には練習をつけて貰えなかったが、残った草刈・岩佐と私が先輩達が使用していた良い場所でやるようになりました。暫くして梅原先輩が学校から費用も出ない、全日本ジュニアに出場することになり、上手な3年生は進学の準備でいない訳ですから仕方なく、私を教えながら、練習台にしたようです。無我夢中で卓球に熱中した時代でした。

その梅原先輩がその年全日本ジュニア大会で第5位の成績を収めたのです。びっくりしました。

1年も終わり頃になりますと同輩の草刈も私も進学希望で練習も休みがちになり、2年生の春の県のインターハイには岩佐・新入生久本・休部状態の佐原（弟）・草刈と編成して大会出場するまでにこぎつけ、恐らく団体・個人戦で1・2回戦で負けたら部が消滅していたかも知れません。

大会に出場とは云え県の他のレベルも解らない状態で、黙々と試合をし、終わって見たら考えもつかない私が優勝となったのです。

大会を終え、自分達の力量が解り、新たな意欲が沸き練習に励んだのですが、佐原（弟）・草刈が去り、時折、母校の中学校である中村第一中学校へ、次年度高校入学受験する者と練習をしました。

3年生の春の大会は新入生5名が入部し、手薄な選手層ですから、1年生にも団体戦に出て貰いました。結果は忘れましたがベスト4位には入ったのでないかと記憶しています。

個人は私が連続優勝とその後の東北大会シングルも決勝で、渡辺（山形県）に勝ち優勝を獲得しました。これも先輩、後輩に励まされ無我夢中で練習をした賜物と思っております。

その後私は中央大学に入学した翌年、（木幡・佐々木・反畑・門馬・小泉）達がやって来られました。東北大会団体・ダブルス優勝・シングルス木幡が小中（青森）に負けたが第2位とほぼ制覇を達成したと聞き大変うれしく感じましたし、伝統を立ち切らずよかったとも同時に思いました。

大学時代は身近には教えを受けた梅原先輩・監督横山さん・堀江さん・鎌田さんいずれも福島県出身でしたので何かと面倒頂き、何とか卒業した訳ですが、1年の後半から生活のために先輩にコーチ先を貰い週3回程やり続けました。

大学での成績は東日本学生Sベスト4・ダブルスベスト4を2回・全日本学生ベスト8位、2年生からリーグ戦出場、の結果で全日本硬式はベスト32が最高でした。

大学卒業後はシチズン時計に高校、大学と一緒に高校の時に東北大会の決勝をした渡辺（山形県）と入社し、全日本実業団大会の団体にて優勝をはたしています。全日本実業団では一層古くなりましたが、渡辺と共に第一期生になり、本年4月渡辺・10月に私も定年を迎えます。

最後になりますが忘れられないのは兄の友達だった西郷さん（現県会長）です。家も近く、福大生の時、実家に帰って来られた時母校に顔を出し、教えて下さった事ありがとうございました。

また今般の大事業の70年史を編集に当たられる方々に感謝申し上げます。と同時に県卓球協会のご

発展をお祈り致します。私も小さいながら県の卓球協会の方々と同じような東京の東村山市連盟の会長をして居ります。

機会を作り、こちらからご挨拶に行かねばと思って居ります。寄稿させて頂きましてありがとうございました。

〔第50回 東北高等学校卓球選手権大会記念誌「白球の軌跡」より〕

第11回大会（昭和32年）出場

男子シングルス優勝

諸 星 光 雄
(福島県・相馬高校出身)

「思 い 出」

東北高体連卓球50周年記念誌の発刊、御目出度うございます。突然の寄稿とのことで、忘れていたタイムトンネルを31年前に逆戻りし高校時代に返って見たいと思います。

卓球との出会い、福島は相馬市（旧中村町）の町立中学校の2年生の時、野球では見込みがない

ので、卓球を始めました。

地域の中学では強い方で小生は補欠の存在でした。しかし遅く始めた小生は徐々に面白くなり、高校進学準備もせず、下級生と卒業時期まで休むことなく練習を続け、S30年4月相馬高校に入学、上級生とは技の差があり、ほんの時々手合わせをして貰える程度でした。1年生の夏休み過ぎから上級生は進学の準備で練習場に来なくなり、その時只一人全日本硬式ジュニアに出場が決まっていた梅原哲次（中大卒）が小生に教えながら練習台として、大会にのぞみ福島県の田舎高校から第5位？とすばらしい成績を残されました。

小生も感動し、更に練習に力が入り、2年生の春、県の大会には何とか人数を集め参加し、小生がシングルス優勝したため、廃部は何んとかまぬがれ、後輩（中学生）の事も考え、練習に明けくれました。

学校の部予算も少なく、大会出場は春のインターハイ・団体県予選のみで、全日本硬式ジュニアは認めて貰えませんし、全国大会に出場してもたかが1、2回戦でしょうし、まだこの家庭でも経済的な余裕がありませんでした。

小生の練習は他流試合もしないし、学校のみでの練習で、休みになると来て下さる梅原、西郷（福島大一現県協会会長）の大学生のボールと触れることが、待ち遠しく又教わったこと・感じたことを、次に来る時までマスターすることを心掛けました。

このような環境で3年生の時東北で優勝した訳ですが、正直なところ他流試合もしてませんでしたし、地元で強い大人もいませんでしたので自分の実力がどの位か解りませんでした。ただいえることは年に数回レベルの高い指導を受けていたのだと後になって解りました。小生3年生になり、待ちに待った後輩が5名入部し、教えながら小生の練習のプレーの幅も広がったような気がします。

2年後、その後輩達がシングルスは準優勝でしたが、ダブルス・団体戦優勝を果たしてくれました。我れながら先輩の残してくれた伝統を後輩に引き継げたと自負しております。

現在はシチズン時計㈱に在職していますが、東京都下、東村山市の卓球連盟の世話役をし地域の各種大会を開催し、卓球にたずさわってます。

東京都下にも東北の関係者が地域の世話役となっている方が非常に多いようです。それは日本の卓球の主流は東北が永年伝統的に続いた事からだと思います。今後も卓球に理解のある方が多い地域東北から優秀な卓球を愛する方々が輩出することを願っております。最後に卓球を通じて得た経験・知識が意識せずとも小生の人間形成に大きな支え・力になっていると思います。そして高校時代という大切な時期が人の人間形成に大きな影響を持っているような気がします。決心し、目標に向かって挑んで下さい。

また益々の東北高体連卓球選手権大会のご発展をお祈り申し上げます。



ふくしま国体の思い出

河野歌子

平成7年、私の住む須賀川市は、卓球と銃剣道の会場となりました。それまでスポーツ広場であった須賀川インター近くに立派なアリーナが建てられ、国体の規模のすごさを感じました。

さて、それより約1年前、地元では国体課を中心に着々と準備をすすめていたところ、式典アナウンサーの一般公募が広報に載っていたのをみて、高校時代つらくてもなんとか続けていた卓球部のことを思い出して是非お手伝いしたいと

応募しました。

選ばれた4名の中で最年長ではありましたが、1年間の研修期間は、いつも楽しく、ためになり、あらためて日本語の響きの美しさとむずかしさを感じました。

そして、式典アナウンサーに選ばれた時から、安女卓球部のコーチとして、熱心にご指導下さった深谷秀三先生に当日必ずお会いできることを楽しみにしていたのです。(まえもってお知らせするとおせず、半分驚かせたかったという思いもあったのですが…)案の定、県代表選手を引率する総監督として、深谷先生のお名前がありました。ハイレベルな成績を収めた県代表選手の方々への閉会式表彰の後に、ゆっくりお話しはできなかったのですが、お疲れ様でしたという想いで、先生の近くに寄って握手をしていただいた事が、ついこの前の出来事のようにです。

初日と最終日の二日間、国体の式典アナウンサーとして無事その任務を終え、お手伝いできたことは、何事にもかえがたい貴重な体験でした。



「第50回ふくしま国体審判員」

—思い出と苦勞—

小林文子

21世紀を目前にして「第50回福島国体」が、平成7年に卓球は須賀川と決まった時、先生から国体の審判をと言われた、しかし私のような未熟な者が務まるかどうか心配で友人と3人で話し合った。責任重大な仕事程やりがいがあるかもと、皆でやる事に決め先生に報告した。しかし返事をしたあとで又迷った。

それは2級審判の資格を取らねばならないからだ。ルールブックを渡され、最初はルールの細則を全部覚えるよう云われた。会社から帰り夕食、入浴してから開くが、すぐに睡魔におそわれさっぱり進まない。2人の友人に聞くと順調の様子、ますます私は焦るばかり、どんなに辛くても取らねば……先生は、3級、2級、1級、国際と1度もつまずクリヤーするのに必死の努力で平成5年12月に合格しとても嬉しかった。次の年平成6年11月長野県檜川村で第3回地球ユース卓球日本代表決定大会に壁谷先生に連れられ始めて審判実務、東京からも20名、一緒に審判をし、とてもやさしく指導を受けた。それが私達に自信をつけさせたのです。

国体の近くになり毎週土曜午後6時に勉強会と大会の打ち合わせで須賀川に通った。試合の事を考えると眠れない時もあった。いよいよ大会になり、天皇陛下のおいでになった時の審判の時、すごく緊張し手の震えを押さえる事が出来なかった。選手に気付かれないよう握りしめ机に押しあて我慢した。私に比べ選手もどんなにか緊張しているだろうと、気を取りなおし審判に臨みました。

試合が始まると、今迄の緊張が、自分でも信じられない程、声も出、ジェスチャーも大きく、今まで、いく度となく講習で練習してきた、成果が出てきたのです。私は、第1日目にして、体の不調で医者の世話になるあり様で、審判を断念する様な状態でした。そんな時、自分も審判をして疲れているのに、他人の世話まで甲斐しく、世話をしてくれた良き仲間助けられ、決勝戦迄、審判を務める事が出来ました。

いろいろの苦勞もありましたが、最後に「良かったですよ」と、審判長(白川さん)の評価に、最

後迄、成し遂げた重大さ、喜びを感じながら、私の人生に忘れる事の出来ない宝物として、思い出に残したいと思います。



「第50回ふくしま国体審判員」として思い出

佐藤 アヤ子

第50回ふくしま国体の卓球競技の審判員となるために少し勉強をしないかと壁谷先生に言われた。それは、「今持っている3級審判員の上の、2級審判員の資格を取る為にだよ、今のところ、我が県には女性の2級審判員は1人も居ないので是非貴方達に取って貰いたいのだ。」これはいつも、東京の審判に行くと思うのです。

俺もしっかり教えるから……3人で相談して、皆、主人の許可を貰った。それでは、平成5年12月にそのテストがあるので、そこを目標に始めた。最初はトーナメント法の組み合わせ、次にシード選手はどこに入れるか、等から入った。今度はルールのしくみについて、まず第1に日本卓球ルール細則を全部覚えること。次に、日本卓球ルールの基本ルール・競技ルールと、大分勉強してからは、わたしがプリントに問題を作ってそれをやらせた。12月のテストは男性3人、女性3人、全員合格した。

平成6年11月、長野県榑川村ナショナルトレーニングセンターで、第3回地球ユース卓球選手権日本代表決定大会に壁谷先生に連れられて、東京からも20名の審判員と一緒に組んで本当の審判法を教わった審判実務が本当に自信になりました。

国体の3ヶ月前から毎週午後6時から須賀川で勉強会があった。特に大会の運営について、試合の事を考えると眠れない事もありましたが私は、第7コート主任を命ぜられ、皆良い人ばかりでチームワークも良く順調に試合も運び、1日目、2日目と目を追う毎に慣れて不安も消え、一流選手の試合が間近で見れるという楽しみを感じることが出来るようになりました。又、最終日には、励まし合いながら続けてきた友と一緒に、団体の決勝戦の審判をすることができとても光栄で、思い出深いものとなりました。

今国体を振り返ってみれば、同じ目標に向かって、皆んなが1つになり燃え、協力して、とても楽しい時間を過ごしてきた様に思います。私自身が審判をやり通せたのは、導いて下さった壁谷先生、そして協力してくれた仲間がいたからだと思って感謝しています。このすばらしい経験は永久に忘れることなく私の心の中で輝いているでしょう。



「第50回ふくしま国体審判員」の思い出

—2級審判資格の尊さ—

菊地 久子

第50回ふくしま国体が近づく事で、ルールの勉強に入り、何回も講習会を受けました。今度の試験は今持っている3級の資格の上、2級審判の資格なのです。この資格を取った女性は、まだ我が県には1人も居ないので、是非取って欲しいとのことでした。

そのためか、壁谷先生の特訓も、とてもきびしかったです。私は試験までには、何回も止めようと思いましたが、なにしろ内容がむずかしく、3級の資格試験とは比べものにならないのです。しかし、仲間、せっかく始めたのだから、ここで止めたら、おそらくもうチャンスは訪れないよと励まされ、心を入れ替えて、猛勉強をしました。

そして、平成5年12月に受験したのです。2週間程過ぎて、壁谷先生に呼ばれ、ドキドキしながら

行ったら、「おめでとう」と言われ、本当にうれしく天にも昇る思いでした。努力が報われたんだ、何事も苦しさから逃げては成功しない事を教えられました。

そして、先生に、「貴方達（3人）は、これから全国大会の、準決勝、決勝の審判をする資格を取ったのです。」と言われ、またびっくりでした。

次の年、平成6年11月14日に、長野県桧川村ナショナルトレーニングセンターで、第3回地球ユース卓球選手権日本代表決定大会に、壁谷先生に連れられて初めての審判実務。東京からも、20名の審判員が来ました。

ここで、2泊3日、東京の審判員と一緒に組んで、本当の審判法を教わったのが、私達の自信になったのだと思います。又、壁谷先生は日本卓球協会からこの大会の審判長に指名され、立派に大会を終了させたのですから、たいしたもんだと思います。私達も、コート主任を福島国体で務められたのも、このおかげだと思っています。

福島県で国体ができたので、私の弟も、成年男子の剣道に出場し優勝しました。大会が成功する事と一緒に嬉しいです。

しかし何と言っても、主婦が家を空けて大会に協力できるのは、家族の協力、特に主人の理解と協力は不可欠で、いつも笑顔で送ってくれた事に心から感謝しています。

「第50回ふくしま国体審判員」を経験して



津島佳子

突然、降ってわいた国体審判の話、お引き受けするまで随分悩みました。中学・高校と夢中で卓球をやったのに……このところ大部卓球とは縁がなかったので（子育てのため）、上手にと言うより、ミスをしなくて、立派にジャッジが出来るかが、不安だったのです。でも先生が言うのなら大丈夫と思い引き受け一生懸命やりました。

あの「ふくしま国体」から、もう4年にもなるんですね。

仕事か、忙しく、感性が、少しずつすりきれているなと思っていた矢先、審判の仕事は、神が与えてくれた、生活のリズムへのスパイスだったのかも知れません。

最初、「何んで、私が国体での審判に……」という気持ちもありましたが、先生に話を聞いて、40歳代で、度胸も持ちあわせた人が、審判員として欲しいのだと言われました。

日曜日ごとに、東北道を飛ばして、講習会に参加、1度も休まず、須賀川アリーナでの、ルール勉強、自分が高校時代の時とは大部変わっている事に気付く、的を得た質問がとびかうようになってきた時は感動でした。

ルールが変わった所をどんどん覚え、皆と話をするうちに、意識も高まり、国体一色になっていったような気がします。

ルール勉強が一段落すると、今度は宣告と、ジェスチャーの練習、ごく自然に声と手が出るのには大部時間がかかった。家で鏡の前で声を出し、ジェスチャーの練習をするように先生に云われてやったのですが……遂に大会当日が来ました。私は、大きな大会で、審判実務を経験しなかったので、最初の審判、二日目の天皇陛下のおいでになった時の審判は、ともに副審だったのに、緊張のあまり声もジェスチャーも出来ず、夢中でした。でも福島国体に携わった事は、ここ4年間の私のステータスとなり、大きな自信となりました。この体験をさせて頂いた、先生始め関係者の皆様、同じグループで手足となって私の世話を頂いた皆様本当に有難うございました。

この事は、いつも忘れず「心の宝」として大事に生きて行きます。

ふくしま国体の思い出

小野田 純 子



五十年に一度の国体がやってくる。しかも卓球競技が須賀川で開かれると決まった時の喜びと興奮は、いまだに私の心に残っている。

さてそれから国体が開かれるまでの数年間は、平石家治競技委員長を中心に、関係者の方々の、御尽力は大変なものであった。毎年、各県での国体に視察団を派遣したり、地元で国体の記念大会を開いたり、講師に水村治男氏（富士短大教授）をお呼びしての講習会、選手強化会、審判の育成など多方面に渡る努力が積み重ねられた。また、会場についても初めは須賀川一中の体育館で開くということであったが、やはりやや会場の規模が足りないという事で、須賀川アリーナの建設が決まり、県内でも屈指の体育館が建てられた。それと同時に、市内にも各地区ごとに地域体育館が整備され、須賀川市民の意識も加速度的に大きく盛り上がっていったのである。「自分達の手で国体を成功させよう」この熱い思いが国体大成功の原動力であったと思われる。

平成七年十月、大会本番では私は記録委員として参加させていただいた。記録委員長は長場壮夫氏、副委員長には岩田悦次郎氏、同じ委員としては武田喜美男、三浦喜春、北村武宣、村越幸市、中村行雄、小澤徳恵各スタッフと共に大会の記録及び記録集の編纂に当たった。記録室には記録関係者以外にも印刷（主任堀田賢治氏）、掲示（主任鹿岡国俊氏）、送受信（主任入谷みちこ氏）の関係の方々もおられ、一つ一つの係内での仕事はもちろん、試合が始まってからは係同志の流れがスムーズにいくかが重要であった。しかしそこは卓球を通しての仲間同志、長場氏、調整の今泉一二氏（総務）のもと、初めはお互いに多少の戸惑いもあったがすぐに慣れ、一週間の大会がアッという間に終わった。誰もが一個人を離れ、国体の成功のみにかけた一週間であった。大会も地元の小塩浩選手の活躍や最後の成年二部の選手達の素晴らしい戦いぶりで大いに盛り上がり、結果も過去最高の総合二位となった。総監督の深谷秀三氏の喜びと安堵の顔が忘れられない。

五十年に一度の国体…終わってみてもその成功にかけた一人一人の熱い思いが、今も私の中に生き続けている。

私のふるさと

藤 田 由 稀



♪安達太良山の空青く～

♪安達太良山に父想い 阿武隈川に母恩ぶ～

♪安達のまゆみ古えの～

智恵子の言う“ほんとうの空”。光太郎と同じ様に私は、ふるさと福島を愛して止みません。福島に生まれ育ったからこそ、今の私があり、卓球人生があると思うのです。そしてその始まりは小学生だった私にある日突然やってきたのです。

両親は新聞を見ていました。三浦卓球道場との出会いでした。そしてそれは恩師、三浦勝美先生との出会いだったのです。最初は週2～3日でした。練習というより遊び場でした。礼儀から勉強まで三浦先生夫妻は、道場は私にとって、もう一つの家でした。小・中学校までは、好きな事ばかりしてても勝っていました。苦しい事など何一つない、ただライバル達に勝つ事が楽しく負ける事が悔しくて、大人の期待が嬉しくて。ずっと一番でいたい、だけど好きだから全然苦しいと感じなかったわけです。そして私は最もつらい3年間を味わう事となるわけです。国体にかけて情熱と裏はらにもかく毎日。応援までがプレッシャーとなって私をナーバスにして行きました。（好きな事をどうして楽しく出来ないんだろう…？）自分の可能性をあきらめかけた時期もありました。やめたくて、楽になりたいくて泣きました。今でも、どちらの道が楽だったのか良く分かりません。

勝つ為に費やす時間の長さ、つらさは時に気が遠くなりそうな程です。でも好きなんです。卓球が。温かい応援が。支えてくれる人達の笑顔が//

卓球を始めた事によって私は素敵な出会いを幾つもしました。多くの指導者、ライバル、応援してくれる人達。私の宝物です。お金では買えないものを卓球は私に与えてくれました。福島が生んだ仲間達は私を含め、今、全国各地で風を吹かしています。国体で得た、プレッシャーに勝つ精神力、数々の全国大会で得た最後の一本まであきらめない根性、勝つ事への執念、そして自分は“福島っ子”だという誇り。そのプライドは常に私を励まします。悔し涙も嬉し涙もあります。下を向いて悩む時、その偉大なる力は私の背中を押してこう言うのです。「真っすぐ前を向きなさい。暗くても止まらず歩き続けなさい。手探りでいいから進みなさい。光りは必ず見つかるから。」と。

福島から全国に、そして世界にノ福島っ子は感謝の気持ちを忘れずに今日も羽ばたきます。



思 い 出

増 田 淳 子

この度は福島県卓球協会設立70周年、まことにありがとうございます。

今回のお話をいただき、卓球一筋だった若かりし時代を懐かしく思い返しました。

私が卓球をはじめたのは今から30年ほど前。長谷川選手や伊藤選手、河野選手などが世界の舞台で華々しく活躍していたころです。日本の卓球はすごいノ私もがんばろうと体育館の片隅で“ピンポン”をしながら、夢だけは大きく持っていたようです。それ以来、中学では佐久間先生、高校では深谷先生、大学進学の際には松崎先生はじめ協会の諸先生と、多くの方々のお力添えをいただいて進んでいけたと、今更ながら思います。

卓球をやれることが何よりうれしかったあのころ。思い出はさまざまありますが、ひとつ挙げるとすれば高校2年の時の国体東北予選でしょうか。当時、福島県の高校女子はいまほど強くはなく、青森や岩手、山形など卓球王国がひしめく東北で予選を勝ち抜くのは、かなり難しい状況だったと思います。ところが、宮城、岩手、秋田に勝ち、次の山形に勝てば東北代表の2県に入れるところまでできました。結果は一進一退の攻防の末、3対1で勝利。

これが団体戦の醍醐味をはじめて知った試合でした。そして、日の暮れた弘前公園を黙々と歩くうちにこみ上げてきた例えようもない心地好さは、いまでも鮮明に覚えています。

この後、大学、社会人と、卓球に関わった11年余り。こういう心地好き以上に苦しさもたっぷり味わいましたが、その分、やっただけの成果は必ず返ってくると教わったのもこの時期。今回あらためて、卓球で得たことが基本にある、卓球をやって本当によかったと、思いを深くしました。

このような機会をいただいたことに感謝しつつ、福島県卓球協会のますますのご発展をお祈り申し上げます。

「第50回ふくしま国体審判員の思い出」



西 片 美代子

卓球競技が須賀川市開催に決定してから大きな大会が開催され、私も競技役員として参加する様になりました。今思うと国体当日よりそこまでのプロセスの中に沢山の思い出と感激を経験した様な気がします。最初は恐ろしいもの知らずで審判をしておりましたが思い出すと顔から火がでる思いです。まさか国体で審判員をするとは思いませんでしたので、壁谷先生よりお話しがあった時は驚きました。でも一緒に頑張ってくれる友達がいた事もあり、まずは2級審判員試験に挑戦致しまし

た。プレイをルールに合わせて判断し、文章に正しく表す事は大変難しく、無事合格した時はホット致しました。反省点の多かった審判は国体前年に行われたリハーサル大会で、女子の部の主審をした時です。大変な接戦で選手も一球一球に集中、結局三時間半以上かかってしまいました。審判長からスピードアップするように注意されるのですが、私自身が試合にのめれた事とコートが本部席のすぐ前という緊張も重なり、オーダー表、コールの間違い等本当に落ち込んでしまいました。同じ年の12月「全日本卓球選手権・個人の部」の審判員として他の方と一緒に東京武道館に行ってきました。前回の失敗を含めてとてもよい経験になりました。際どいプレー、早いボールの見極め、正しい判断と自信を持っての動作それらの技術を身につける為の必死の3日間でした。又、皆さんと「ふくしま国体」の成功を誓い語り合った事も楽しい思い出になりました。

いよいよ大会当日、不安の中に無我夢中でスケジュールをこなし「あっ」と言う間に終わりました。選手の熱気、地元の声援、国体に関わった方々の熱意、すばらしいアリーナそういうものを感じながらの充実した期間でした。最終日の決勝戦は緊張しながらも無事終える事ができましたがきっと小さなミスが沢山あったのしょうね。選手の皆さんが力を出せるような審判が出来たかどうかわかりませんがきっと私達の思いは伝わった事と思います。

最後に一緒に審判員をした皆様、ご指導して下さいました壁谷先生本当に有り難うございました。又、補助員をしてくれた高校生、快く動いてくれて有難う。卓球協会、国体課の皆様ご苦勞様でした。国体で出会った方々、そして経験をこれからも大事に行きたいと思います。



「国体出場の思い出」

反 畑 秀 彦

昭和34年の第13回東北高等学校卓球選手権大会（山形県山形市）は、私の母校、相馬高校（木幡・佐々木・門馬・反畑）が、団体戦優勝、個人戦ダブルス1、2位となる等低迷していた福島県の代表としては歴史的な成果を収めた。

引き続き行われた国民体育大会東北ブロック予選会には、フットワークを生かした速攻型の木幡（相馬）、カット主戦の反畑（相馬）、右ドライブの白幡（郡山商業）の3名がチームを組み出場した。試合形式はシングルス4、ダブルス1で3点先取。福島県チームはシングルスに木幡、反畑、ダブルスを木幡・白幡のオーダーを基本にした。当時、協会や高体連関係の先生方の話によれば、例年の東北ブロック予選会は青森、秋田、宮城、山形が強く、予選通過となる2県には福島県は全く力が及ばない状況が続いていたと言う。いつも4県の中心選手にインターハイの上位選手がいたからである。

しかし、結果は神懸かりのように5戦全勝で東北ブロックの代表になってしまった。

全勝でブロック代表となったのだから木幡選手も白幡選手もかなりの勝率を挙げたが、カット主戦の私は何度か上位選手を破り全勝した。母校の引率の先生に「反畑、ずい分強くなったなー」と言われた言葉が思い出される。

その年の秋、国民体育大会は東京で開催された。東京オリンピックで改装される前の千駄ヶ谷の国立競技場で開会式が行われた。すり鉢型で満員の国立競技場のメインスタンド前を行進する時、鳥肌が立ち感激したのを覚えている。地元の東京都のユニフォームが高校生ながらカッコ良く、スマートに見えて憧れ、“一度あのユニフォームを着てみたい”この思いが後の東京代表として国民体育大会（新潟県）に出場する源となった。

卓球会場は浅草駅から徒歩約15分、隅田川のほとりにある台東体育館であった。

監督は郡山女子高校の宇賀神喜嗣先生。先生も福島県高校の部の出場が東北ブロックの予選を勝ち抜いての画期的な出場で、上位入賞が可能との期待もあったのだろうか、緊張気味で無口であったように思う。作戦的コーチはほとんどなく、以外性を発揮する私たち選手を真剣に見られていたような気がする。

そして、福島県は勝ち進み京都府と対戦した。当時、京都府は名門東山高校の有名選手を揃えていた。それに比べ福島県はおそらく無名選手のチームであつたろう。結果は、2対3で惜敗した。

試合が終わって観覧席の福島県ベンチに戻ると、県出身者の卓球指導者がいて、“ダブルスの3セット目のサーバー、レシーバーの相手をどうして優勢だった2セット目と変えたのか、変えなければ3セット目後半は有利になり勝てたのに…、惜しい試合を落とした”と何度もくり返された。私たち選手以上に残念でくやしい思いだったようだ。

この団体戦の敗戦は私のその後の選手生活の糧になった。

高校生の若さゆえ、練習量で培った勘と勝つことに対する執念のようなもので、ただ一生懸命卓球をしていた私に、戦略、戦術の重要性を教えてくれた。この事をさらに実践的に知ったのは、大学に進学し、今は亡き萩村伊智朗先輩と出会ってからである。

以上

ピンポンから卓球へ

井 上 六 郎



私がピンポンを始めたのは小学6年ごろでした。その当時の球はセルロイド製の玩具のようなもので軽く、柔らかくて、すぐに割れ目が入り、それを子供ごろに飯粒の糊で張り合わせ縁側などで一人で楽しんでいたことを今でも懐かしく思い出します。

しかし糊で張り合わされたものですからすぐに使い物にならなくなります。代わりの物を手に入れようとしても、金も無く物も不足していた時代で思うよう

にいきませんでした。

へら（ラケット）も手作りの板製のものでした。

その頃から退職時まで卓球を友に楽しんできました。昭和45年、原町二中に転任したころ、福島県卓球連盟との交流が始まりました。間もなくして福島県卓球連盟、相双支部に係わるようになりました。そして、多くの大会行事が生まれ、活気あふれるようになりました。昭和51年、双葉中に赴任し卓球の部の専門委員長に推され本格的に福島県卓球協会と関わるようになりました。

52年、県中体連が初めて浜通り地区で開催され、卓球は双葉町体育館が会場となりました。まずコートを確認しなければなりません。当時16台備えたところはありませんでしたので、南は檜葉、北は浪江まで足をのばし16台を集めました。次は審判の確保、これは近隣の高校にお願いしました。そしてカウンターの準備。市販されたものはなく当時、県立原町高等学校勤務の西郷先生（現協会長）の手作りのものをお借りしそれを見本にカウンターを作りました。西郷徹夫先生には大会について、いろいろとアドバイスをいただき今でも感謝しております。

双葉町には、会場はあるが宿泊するところが少なく、浪江まで足をのばさなくてはなりません。

宿泊係がその責任を果たすべく、旅館の割り振りをしたことにより、旅館組合長よりひどくお目玉をいただいたことも懐かしい思い出です。

その後、度々県大会、東北大会などが開催されるようになり大会及び、会場運営にあたりました。

卓球協会が関わっていただくようになってからは、中体連も、トラブルが少なくなり、大会もスムーズに運営できるようになりました。

会場を設営し、大会を運営することの労苦も今は、懐かしい人生のひとつまになっっています。

福島県卓球協会の皆様のご健勝と、益々のご発展をお祈りいたします。

卓球に魅せられて

斎藤 恵美子



最近テレビのコマーシャル等に、いろいろと面白い情景で登場するようになった卓球。卓球愛好者の私としては嬉しい限りです。なにしろ暗いスポーツの代名詞のように言われて、いささか腹立たしい思いだったので、スポンサーの方に「ありがとう」と、拍手を送りたいくらいです。

今までの白いボールがオレンジ色となり、卓球台もグリーンから鮮やかなスカイブルー、ユニホームに至っては油絵の抽象画のように華やかな色柄になって、“明るいスポーツ卓球”をイメージさせています。

ところで硬球に関して言えば、年齢、体力が大いに関係するところですが、“ラージボール卓球”これは年齢も男女の差もほとんどありません。

ボールは大きくて軽く、打っても打っても嫌になるくらい返ってきます。最初このボールを目にし、耳にした時に、なんて変な音なんだろうと、打球音に拒否反応を示したものでした。弾まないし、落ちるし、早い打球をする私にはこれは向いていないと思いました。でもそれは大きな間違いで、ただ単に私が下手だった訳です。

いわき卓球協会会長の佐藤昭典さんや、いわき卓球センター社長の橋本義一さんに飽きずに教えていただき、お陰で、今では週二回、気のおけない仲間たちと思いきり打って、打たれての快感を味わっています。

佐藤昭典さんといえば私には無くてはならない恩人です。楽しさ、苦しさ、そして感動の喜びを学生時代に味わわせて下さった方なのです。

また部活の顧問であった安田一三先生も、そのお一人です。生徒よりも早くから部室に来ては、腕組みをして私達を待っていてくださったものですが、“親の心子知らず”の不肖のキャプテンは、コーチの佐藤さんの方だけを見ていた記憶があります。

しかも、無器用の上に負けず嫌いの私には人一倍手がかかったことでしょう。

インターハイ・国体・全日本選手権大会等の貴重な経験は、お二方と、部活を共にした友から戴いた宝物だと思っています。

これからも卓球を楽しんでいきたいと思います。現在、一緒に練習をしている皆さん、どうぞ、今後共、よろしくお願いします。

私と卓球

田辺 ふみ子（旧姓 佐藤）



私と卓球との出会いは、中学生になってからで、中学校時代は遊びの域を出ないものでした。郡山女子高校に入り、深い考えもなく卓球を選び宇賀神喜嗣先生と巡り逢ったことが、いまに繋がる卓球生活の始まりです。郡女卓球部は、規律も練習も厳しかったので、三年になると部員は数名となってしまいます。私は一年の初めの頃はランニングにはついていけないし、技術も下手でしたので副顧問の梅田秀男（旧先崎）先生にもお世話になりました。

伝統のある学校とは知らず、偶然選んだことに縁の不思議さを感じます。宇賀神先生は技術面では基本の大切さを、メンタルな部分では座禅なども取り入れたりしながら、いろいろと教えてくれました。今になってようやく先生の話していた事、話したかった事が分かるようになりました。

高校では、県大会で団体初優勝をし、個人でも優勝カップを何度か手にしました。インターハイを二度経験し、三年の時には個人でベスト8に入り、目標としていた成績を残すことができました。また全日本に出場できたことも、良い思い出です。今は母校も郡山東高校となり、共学になったと耳にし時代の流れを感じています。

卒業後、トーアエイヨー(株)に入社して、26回国体の女子団体のメンバーとなりました。トーアエイヨーの卓球部でも、全日本実業団軟式で準優勝などいろいろの思い出があります。在職中、卓球はもちろん職場でも周りの方々に恵まれ、主人にも巡り逢いました。その後暫く卓球から離れていましたが、15年程前まら、豊島区で再びラケットを握っています。現在は、豊島区で卓球連盟副理事長・区立体育館個人公開指導員・区立中学校スポーツ解放管理指導員・区体育協会レディース常任委員などとして活動し、地域の方々と一緒に卓球をしています。

選手としては、近隣のオープン戦・クラブチーム戦・都民大会の代表や、東京選手権には年代別で東京代表として出場しています。

卓球を始めてから30年以上になりましたが、これからも、教えてもらったり教えたりしながら、たくさんの仲間や友人と共に、卓球に関わって行ければと思っています。自分を振り返ってみてあらためて、育ててくださった先生はじめ、卓球関係の皆様は心からお礼を申し上げます。



「第50回ふくしま国体審判員」

横山 正子

第50回ふくしま国体が成功に終わり、早いもので4年の月日が経とうとしています。先日の事のように思い出されます。卓球会場が須賀川に決まり、私も卓球に携わっていましたので国体のお手伝いをしなければと思っていましたが、まさか卓球審判の役目を仰せつかるとは思っていませんでした。国体副審判長をなされました船引町の壁谷先生よりお電話をいただきまして「審判を須賀川地元の人達がやらないでどうするのだ！」とお叱りを受け、それからの一年間が大変でした。3級審判は持っていたものの、2級審判は持っていませんでしたので、取得の為の勉強が始まり本当に学生以来の勉強、繰り返し繰り返し覚えようとする文字を頭の中に入れようとしても、反対から抜けてしまい、今になって頭の回転の鈍さに、自分自身惜けなくなりましたが、その成果があって2級審判合格「やった！」という思いがいっぱいで、とても嬉しく学生時代に戻った様な気分になりました。

平成6年全日本卓球選手権団体が11月18日から20日までの3日間須賀川アリーナで行われ、又東京武道館で行われました全日本卓球選手権大会の個人の部の審判に行った事も懐かしく思い出されます。暮れの12月21日から3日間忙しい中に貴重な体験をしてきましたが東京、大阪、広島、それぞれの次期国体開催の審判の人達、2年後の開催地の人達も審判の勉強に来ているのに驚いてしまいました。武道館での審判のスケジュールがとてもハードでしたから、朝から夕方まで大変だったと記憶しています。緊張もしましたし、無我夢中でした。副審判でしたので、皆さんにいろいろと教えていただき東京大会の審判が、すごく私に自信をつけさせてくれました。その結果として、国体の審判も胸を張り自信を持ってする事が出来たと自負しております。私もまだまだ卓球に携わっていきたいと思っており、お母さん相手に卓球をしたり、スポーツ少年団の子供を相手に楽しんでいます。中年になっても昔とった忤柄で(たいした腕ではないのですが)大いに健康に役立っており、一生の友として行きたいと思っております。

「喜多方高校卓球部OB会設立30周年を迎えて」



喜多方高校卓球部OB会 五十嵐 修 二

県卓球協会創立70周年おめでとうございます。

さて、私たちの母校である喜多方高校も昨年創立80周年を迎え、また、喜多方高校卓球部OB会も30周年を迎えることができました。そこで、当会の歴史について投稿させていただきます。

喜多方高校卓球部OB会は、会員総数約300名余りで、文字通り喜多方高校卓球部の卒業生で構成されている。設立は昭和45年1月に当時卒業したての秋山昭正氏（現会長）、三橋信一郎氏、高麗正規氏、そして一年先輩の田部幹夫氏ら数名で発足し、毎年正月に総会と卓球交流会を行ったのが始まりである。昭和53年、10周年を機に毎年8月の開催となり、この年に現役への卓球マシン贈呈と元世界チャンピオンの伊藤繁雄氏を招いての講習会を開催した。また、昭和63年には20周年記念事業として、現役へ『燃えろ、桜壇健児』の部旗の贈呈、記念誌の発行、北山中や喜多方1中などで幾多の県優勝など輝かしい指導歴をお持ちの水戸昇氏（昭27年卒）と、関東方面で事業の大成功を遂げている高麗正規氏（昭43年卒）の記念講演会を行った。平成10年の30周年記念事業では、現役への卓球台の贈呈、記念誌の発行、甥日本卓球協会マスターズ委員長で唐橋卓球代表取締役社長の唐橋博氏（昭26年卒）の記念講演会を行った。

OB会の活動としては、毎年現役への資金援助、地元OBで構成されている月例会開催、OB会の関東支部結成、そして、佐藤誠氏（昭56年卒）の呼びかけで始まった今年で7回目を迎える全会津小学生対象の喜高OB会杯スボ少交流大会などがある。

喜多方高校の大会実績では、会津や県大会での多くの人賞者を輩出してきたが、県優勝記録は須藤泰子さん（昭53年卒）、昭和53年の県総体女子団体、内海香津代・鈴木真由美組（昭55年卒）、小田切敬氏（昭56年卒）、岩本爾郎氏（昭58年卒）、武藤小百合さん（昭59年卒）などがある。

歴代顧問では、三留昭男先生、手代木健先生、遠藤良市先生らが選手の育成に努められた。

現在では、県や会津、地元の卓球協会などで要職を担っている方も多く、中でも菊地敏美氏（昭53年卒）らが活躍している他、学校やスボ少などでの指導者として頑張っておられる方も多い。

また、岩本爾郎氏は県のトップクラスとして現在も活躍している他、各地域で多くのOBが頑張っている。県卓球協会の発展に負けぬよう、これからも我が喜高卓球部OB会も頑張りたいと思います。

「ふくしま国体の思い出」



生 井 一 弥

「ふくしま国体」という言葉を聞くと、今でも当時の記憶が鮮明によみがえり、あの当時の感動がありありと思い出されます。

当時私は、県立白河高等学校に勤務しており、「ふくしま国体」には、平成7年4月から授業や部活動の指導の合間を縫って本番へ向けての準備に微力ながら係わっておりました。

役員への制服が支給されたときは、正直な話、ホッとしました。これで自分も「ふくしま国体」に携わることができるんだという実感がわいてきたものです。

卓球競技の制服は開催地、須賀川市のシンボルでもある「牡丹」をあしらった、シンプルな中にも力強さを感じさせるネクタイ、そして制服そのものも中々好評でした。

そして本番を迎えるわけですが、私の係は、総合成績計算委員ということで、飛田徹先生（当時郡山女子高等学校、現在須賀川高等学校勤務）と2人で各部門からの結果報告を基に得点を計算し、大会本部へ送るという仕事でした。間違いがあってはならないということで何度も見直しをした覚えがあります。

また、総合成績を計算し、外部に送るということで、専用の部屋に詰めており、そこから本県選手の活躍を応援していました。どの試合も手に汗握る熱戦であり、国体に懸ける各県の意気込みが伝わり、とても素晴らしい試合が多くつい仕事を忘れ熱中してしまうこともありました。

とにもかくにも、本県としては、選手・役員・地域の方々やその他大勢の人々に支えられて、国体が成功したのだということを肌で感じる事ができ、とても好い経験をさせていただきました。この経験を生かし、今後の人生においても常に感謝の気持ちを忘れずに頑張っていきたいと思います。また、これからも本県の卓球協会が益々発展していくように微力ながらも協力していきたいと思います。



「東京選手権サーティの部優勝を果たして」

原 晃

平成10年度東京卓球選手権大会サーティの部で念願の全国初優勝を果たすことができました。

これまで、全国大会の決勝には2度進出しましたが、1度は全日本軟式大会で徐向東選手、2度目はクラブ選手権で斉藤清選手に敗れていますので、3度目の決勝戦挑戦でした。

私は、中学1年生から卓球を始めましたが、夏休み前に医者から貧血と診断され、夏休み1か月間の練習を休むようなひ弱な体でした。中学3年間で最高の成績といえば3年生の時の中体連県大会ベスト8でした。

また、高校では3年生の時、インターハイには出場しましたが、1回戦で負けました。

その後、地元の東京電力(株)福島第二原子力発電所に就職し、卓球を続けています。

福卓会の発足と同時に同クラブに入会し、良き先輩・良き指導者に恵まれ、各種全国大会で上位入賞ができるようになりました。

これからも生涯現役にこだわりながら、後進の指導に情熱を注いでいきたいと思っています。



「卓球と出会って31年」

大和田 元一

福島県卓球協会設立70周年、おめでとうございます。その年に役員として携わることができ、とてもうれしく思います。

私が卓球に関わったのは31年前、小学6年の春頃、友達と近くのメリヤス工場に遊びに行った時、板を何枚も継いで作った卓球台で先輩がピンポンをしているのを見て興味を持ったことからでした。中学入学後、そこで練習をしていたその先輩方がとても上手に見えたものです。当時、一年生は殆ど素振りと球拾いだけで、実際に台で打てるのは、練習終了前30分程度でしたが、とても楽しく感じました。顧問の大澤先生に恵まれ、翌年の新人戦から中体連まで地区で1位になりました。しかし所詮「井の中の蛙」で県大会では、なかなか初戦を突破することができませんでした。

高校に入ると、中学時代とは違った雰囲気期待と不安を抱きながら卓球を続けました。辛かったことが多かったはずなのに、現在は楽しかったことしか思い出せません。県大会1回戦、緊張のあまり試合にならなかったにもかかわらず宿舎で大騒ぎ、先生に叱られたのも懐かし思い出されます。

高校を卒業し社会人になると、市卓球協会関係者と、お付き合いが始まり、徐々に協会のお手伝いをするようになりました。当時は、何の役もなかったせいか、気楽な気持ちでしたが、その後理事になり会計の仕事を任されてからは、協会の一員であることの自覚を一層持つようになりました。

第50回福島国体卓球競技では、役員として参加することができました。準備作業は、毎週のように各係り毎に開かれ、大会の盛り上がりを感じることができました。十分に準備を済ませて、大会に臨んだはずでしたが、いざ開会すると、思いがけないことが出て会場内をかけずり廻ってました。それでも、福島県の試合になると、持ち場を離れてつい応援に夢中になっていました。終わってみれば、輝かしい本県の成績、とても嬉しく、喜びました。約1年間の準備、数日間の大会でしたが、私にとって、忘れることができない1ページとなりました。

その後、県中支部小中学担当理事として、県の仲間に加わり、現在諸先輩方と、競技力UPに努力しているところです。

「ふくしま国体」の審判員を務めて



河村 朝子

平成7年福島国体が開催されてから、早くも4年が過ぎようとしています。国体の卓球競技役員の依頼をいただいたときは、嬉しく思いました。当初は記録掲示係ということでしたが、その後、須賀川市を会場に開催される国体なので、審判員を務めることになりました。「やってみたい」という気持ちはありましたが、不安で眠れない日もあったのを覚えています。

壁谷之夫先生の励ましもあって2級の資格を取得し、平成6年度全日本卓球選手権大会（個人の部）の審判をすることになりました。会場は東京武道館でした。これが国体の審判をするうえでとても良い経験になりました。ドキドキしながら1日に12試合の審判をしました。有名な選手も出場していて大変光栄に思いながら仕事をしたことを覚えています。

平成7年には県内外の審判員の人達と講習会を受け、また県内の中学校の県大会決勝の審判を何回かしていくうちに少しずつ不安もなくなり、また、審判員同志も気心の知れるようになって、当日を迎えることができました。

コート主任としては、緊張の毎日でしたが、決勝の審判が終了した時は、地元の国体で審判ができた感動にひたっていました。

国体の審判員として経験できたことは、私の人生の1ページとして、すばらしいものになりました。また、会場に飾られた通常の開花時期と違う10月に咲いている牡丹の花のすばらしさに感動しました。選手、役員を歓迎して咲いているようでした。私は毎日、赤やピンクの牡丹の花に励まされていました。

第50回国体に私と長女は卓球、夫は体操、次女は水泳と家族全員がそれぞれ立場は違っても、携わることができたことも嬉しく思っています。

最後にこのような経験をすることができたことに対して、また大変お世話になった副審判長の壁谷之夫先生をはじめ多くの方々に対して今でも感謝をいたしております。

ふくしま国体と私



大越 守

「地元の選手の活躍が素晴らしかったね」「両陛下もお出でになられたからね」「大成功だよ」今でも、国体が話題になると、多くの方々からお褒めの言葉をいただき、国体に携わったことを、喜びと共に誇りに思っています。

国体時は、卓球競技の会場委員長として、係のスタッフ、審判員、式典係をはじめ沢山の人の協力を得ながら、会場の設営に当たり、無事に役目を終えることが出来たことを心から感謝しています。

私にとってのふくしま国体は、特に思い入れの深いものなのです。といいますのは、昭和60年当時須賀川市教育委員会保健体育課長を務めていました、高木市長から「国体の種目は、何を考えているのか」とのご質問があり、「卓球、銃剣道とクレイ射撃を考えております」とお答えしました。特に、卓球を第一候補にしたその理由として、多くの大会運営を手がけ、競技運営に精通する人材が揃っていることを挙げ、ただ、市には会場となる体育館がありませんとお答えいたしましたところ、建設計画中の須賀川一中体育館を、国体の出来るよう建設部と相談するよう命ぜられました。

当時の国体では、設置台数10台ということで、それに見合う床面積、引き出し式の座席とギャラリーを合わせて約1,000人の観客を収容する案を持って、建設部と協議し、中学校としては県下で1、2位の床面積を持つ体育館が建設されたのです。しかし、卓球関係者としては、より国体会場に相応しい本格的な体育館を建設することが悲願でした。

ご承知のように、その後立派な須賀川アリーナが建設され、新しく、大きく、優れた設備、空港も近く、高速道路インターを降りるとすぐという便利さ、広い駐車場、加えて景観の素晴らしさ等、両陛下がお出でになれる会場に選ばれたのもうなずけます。

教職を退職後、国体課に勤務させていただき、開閉会式の企画・演出、誘導員の中学生の指導、炬火リレー搬送指導等に携わることができ、その上、会場係としてその成果を、始めから終わりまで見届けることが出来たのですから幸せというほかありません。

今後も、福島県卓球界の益々の発展を期待すると共に、自分の健康維持のため、しばらくぶりにラケットを握ってみようと思っています。

「私の思い出」



岡 田 晶 子

私は今年4月から「NEC相模原」に入社して、卓球部に入部し、現在慣れない仕事と卓球の両立に追われる日々を送っています。この不況の中、卓球を通して就職できたことを大変うれしく思っています。こうして今でも卓球を続けてこられたのも、福島県卓球協会の方々のご理解とご協力があったからだ、と痛感しています。

私は小学2年生からラケットを握りはじめ、大学4年生まで「福島県」の選手の人として、数多くの試合に出させていただきましたが、印象深い大会が2つあります。

1つは、「ふくしま国体」です。私は当時大学1年生でしたので、「成年女子1部」で出場したのですが、国体の試合に参加するのは初めてで、なおかつ地元開催であり、普段以上に緊張していたことを覚えています。総合開会式で行進した時の歓声と興奮は今まで参加した国体の中で最大だったと思います。

もう1つは、去年開催された「かながわ国体」です。去年の東北総体で東北6県中2県という、厳しい予選を通過しての試合でしたが、ベスト8入賞ということが大変うれしく思いました。福島県から出場する大会で団体戦は最後でしたので、のびのびと楽しみながら、しかし悔いの残らないプレーを心掛けました。成年女子で入賞したのは初めてで、と聞かされて、喜びは倍増でした。特に印象深い大会を2つ挙げましたが、中学、高校時代の思い出としては、強化リーグと県外遠征があります。2ヶ月に1度の強化リーグは、戦術的にも体力的にも成長できたと思います。また強化リーグの成績が良ければ県外の競合選手と試合ができたので、レベルの差を肌で感じる機会が得られました。このことがあるおかげで、本番（国体や他の全国大会）で活躍することのできる選手を輩出しているのではないかと、思います。

冒頭にも書きましたが、今年4月から社会人として新たな出発をしました。今後は「神奈川県」から出場することになりますが、心の中ではいつも「福島県」を応援しています。

福島県卓球協会の益々のご発展を心からお祈り申し上げます。

卓球生活の回想



福島 正 子 (旧姓 尾形)

「福島県卓球協会 70 周年」誠におめでとうございます。

私は中学から卓球を始めましたが、現在でも仕事の傍ら余暇は卓球第一の生活をしております。福島県卓球協会にお世話になりましたのは高校生まででしたが、若い時分に培ったものが、これ程までに私の人生に豊かさを与えてくれたことは何物にも変えがたいものであり、このことを考えるとお世話になった協会に感謝せずにはいられません。

また、お手紙で宇賀神先生がこの度の編集委員長ということを知り、昔お世話になったことを考えると何とか手記をとペンをとりました。私の高校時代は、顧問の斎藤先生と大内コーチという指導者に恵まれたお陰で、精一杯のびのびと卓球生活ができ、そして県内の各大会で優勝という経験を味わうことができました。ただ残念なのは県外の大会になるといつも2・3回戦という結果に終わってしまったことです。今考えると、井の中の蛙で目標が小さかったなあと思うものです。こうしてペンをとりながら昔の出来事をひとつひとつ思い巡らせると走馬灯のようになつかしく思い出されます。その中で一番印象に残ったのは、何と言っても高校3年のオールジャパンジュニアの部で第3位になったことです。その一つの出来事と言うか戦績で私の人生が大きく変わりました。

その後、専修大学へ、そして日興証券株式会社で現役を過ごし、結婚後は埼玉に移り、所沢市役所に入って社会体育の一環として、家庭婦人の組織をつくりました。仕事を受け持ち、市内各地で卓球教室を開催し家庭婦人部という組織をつくりました。今では所沢市の家庭婦人だけで350名という多くの会員が活発に活動しております。福島で芽を出した私の卓球人生は、専修大学・日興証券で育ち、最後は所沢市に根をはることができました。全国レディス等で福島県チームと出会うことができましたが、もし私がふるさとを離れていなかったらレディス大会では福島県の代表として一緒にしたかもしれないなどと思った次第です。

何と言っても、ふるさと福島県には強い思いがあります。福島県卓球協会の今後の発展に大いにご期待申しあげ、私の回想といたします。



私の卓球人生の中での忘れられない中国遠征

佐々木 トシ子 (旧姓 橋本)

この度は、福島県卓球協会創立70周年おめでとうございます。

このような記念すべき時に、私の卓球人生を振り返る機会をいただき幸に思います。

思いおこせば、昭和33年4月郡山女子高等学校に入学し、卓球部の練習を眺めているうち自分もやってみたいと思い卓球を始めました。少し上達すると楽しくて勉強は二の次となり放課後が待ち遠しくなっていた事を覚えております。また顧問が宇賀神先生で部活動に大変熱心な先生でした。

その先生と先輩方のご指導により、三年生の時地元郡山開催での東北大会に出場でき選手宣誓という大役迄経験させていただきました。そのうえ岡山でのインターハイにも出場できました。

もっと強くなりたいという思いから、卒業後東京の三井生命保険相互会社に入社し、そこでもまたまた熱心な浅田監督との出会いがあり、大きく育てて頂きました。

入社した昭和36年5月全日本実業団軟式の部でチーム優勝し、その後もチームは常に上位にいて、昭和42年の大会では硬式の部で準優勝しました。

個人戦では昭和39年度全日本軟式選手権大会優勝、と自分でも信じられない成績を残せた事が後々の私の卓球人生広がり礎となりました。そしてこの優勝をきっかけにして全日本の強化選手に選ば

れ合宿に参加し萩村伊知郎氏を始め素晴らしいコーチの方々にご指導を受けることができました。

私は運よく中国遠征代表選手のメンバーにも選ばれ、昭和41年8月22日から9月21日迄の1ヶ月間、広東、上海、杭州、北京と転戦して参りました。折しもそれは歴史に残る文化大革命の始まった年であり、未だ日中国交も正常化されていない時でした。今でもあの革命闘争の様子と雄大な大地の光景は脳裏に焼きついております。

昭和41年12月に行われた全日本硬式選手権大会では、シングルは16位決定で敗れましたがダブルスでは専修大学の磯村選手と組み準優勝しました。今こうして振り返ってみますと走力筋力も無く運動神経の鈍い私がよくここまでこれたをつくづく思います。救いは柔軟性があったことと、自分の運動音痴に気付いていなかったことです。

現在は大病を患い苦しみました、リハビリと卓球仲間の励ましによりママさん卓球の球出し位はできる様になりました。卓球で出会った方々に育て助けて頂いたと思い感謝の気持ちで一杯です。

「卓球と協会との出会い」



大嶋 克子

大嶋 克子

私が初めて卓球部の顧問となりましたのは、いわき市立内郷第三中学校でした。県の中体連の女子の部で優勝を飾った芳賀利允先生の後任となり、単にピンポンを楽しんでいただけの私には、苦難の道となりました。大役を引き受けた以上はしっかり責任を果たさなければならないと思いました。卓球の選手として頑張った夫に理論と実技を教えてもらいながら歩みはじめました。そして、更に

選手を強化するために門を叩いたのが、磐城第一高等学校でした。その当時の顧問をしていたのが鈴木理介先生でした。それがきっかけで、理介先生の手伝いをするようになりました。時々やっていた組合わせが、実は協会の仕事だということを初めて知りました。やがて協会の理事になるなんて予想もしませんでした。

あれから28年。私から卓球を切り離すなんて考えられないようになりました。いわき市の中体連卓球の専門部長として20年余りを頑張り抜いた武田喜美男先生の陰になり、又コンビとして中体連と協会の連携をはかるため、無我夢中で橋渡しをしてきました。何が何だか分からない行動。そして協会の仕事が目に見えて理解でき、どんな活動をすべきなのかを悟り、何とか動けるようになったのは、ここ10年位であると思います。中体連と高体連と協会と協力・理解し合えて活動をしています。今日までになるには、何かと困難な道程であり、協会では大変な苦勞を重ねられてきたことを伺われます。ルールが敷かれた上で活動してきた私は、頭が下がる思いで一杯です。幸か不幸かそんな中で、ふくしま国体に際して、審判員として参加できたことが、私にとって一番誇りに思うことであり、そのうえ自信につながったことです。国体の為に何度も何度も繰り返し行われた打合せ、そして講義や実地訓練。曖昧だったルールも学習していくたびによく理解でき、自分の知識のなさを情けなく思いますが、本気で学んだあの日々。厳しい中にも優しく指導して下さった壁谷之夫先生。本当にありがとうございました。そしていざ出陣。リハールサルを兼ねた東京体育館での全国大会。初めての体験にしては、あまりにも大きすぎる大会。緊張で手がサッとあがらず、ワンテンポ遅れがちのカウント。しかも声もうわずって、全身が冷汗で一杯でした。あの時のことは、決して忘れられない思い出の一つとなっています。そして本番。一週間宿泊をしながら審判に明け暮れたふくしま国体。有名な選手。一つ一つの素晴らしいプレー。目のあたりに感動と緊張とが交差し、頭の中が真っ白で、ただ肉体だけが反応しているような、なんとも言い表わせない情景であったと思います。ふくしま国体が終了と同時に、肩の荷がやっと降りた時のあの安堵感。いずれも忘れたくても忘れられない思い出です。そして、たくさんの人との出会いができたことは、素晴らしいことでした。一つのこと的一致協力し、出来た喜びを共に笑い、手を取り合い、「ごくろう様」を言い合ったふくしま国体も、随分昔のように懐かしく思われます。あの時の出会いは、今日で

も身近で、互いに声を掛け合い、特に協会の大会では、顔を合わせ親しみ感に浸っています。

学校という教員の輪から脱した人との出会いは、私を大きく飛躍させてくれました。そして協会の理事として、中体連いわき市の卓球専門部長として、たくさんの人に手を差しのべられながら、一生懸命責任を果たす為に努力している今日です。

「道程」僕の前に道はない 僕の後ろに道は出来る ああ 自然よ 父よ 僕を一人立ちにさせた
広大な父よ 僕から目を離さないで守ることをせよ 常に父の気魄を僕に充たせよ この遠い道程のため この遠い道程のため

偉大な力を持つ自然に折り、その自然のように力強く自由に生き抜いていきたいという決意が感じられる、高村光太郎の詩ですが、私が人生の歩みの手本としています。人生の中で一番大切なこととは、人との出会いです。出会いによって生き方も違ってきます。だからこそ、人との出会いは大切にしたいと思っています。私にとって、人との出会いは、自分を大きく成長させ、てきぱきとした判断力により、自信をもたせてくれました。だから今後とも人との出会いを大切にしていきたいと思っています。



「大会参加の思い出」

松 本 厚 子 (旧姓 奥村)

卓球協会 設立70年 おめでとうございます。

一口に70年と申しますのも色々な歴史があったかと思います。今から思い起こせば昭和28年高校1年の時に、徳島県での国体に参加して強豪京都府に勝って嬉しかったことです。帰りに金毘羅さんによって階段を奥の院まで昇ったら1,400段近くもあったこと。また、栗林公園では錦鯉がいっぱい泳いでいたことなどの記憶もあります。その後、その年の11月に奈良県の全日本硬式選手権大会で5回戦まで勝ってトントン拍子に勝つことができました。その後油断が出て、高校2年の時に、スランプに陥りました。苦しい経験の中で得た結論は「今までの成績に甘んじていてはならない」と気がつき一から出直すことの必要性が分かりました。高校3年の東北大会でダブルスで優勝しシングルスは第2位でした。さらに、その年の7月に札幌市で行われたインターハイの全国大会で勝ち得たものはシングルス第二位という成績でした。帰ってくるなり福島駅の改札口で先生に叱られた思い出があります。「なんで優勝して帰ってこれなかったのか」と云われたのですが、優勝カップがチラツキ負けた

という苦笑するしかありませんでした。本当は実力の差だと痛感したところです。

32年に卒業と同時に静岡県の富士紡績に入社、静岡県代表になって初めて郷里の福島から離れてしまい残念な思いもしました。思い出の一ページは33年の富山県の国体で世界選手権で6回優勝をしているルーマニアのロゼアヌ選手を敗った山口県の田阪選手に勝って国体で3位入賞した時は大変うれしい思い出となっています。そのうえ、大会では福島の選手のみなさんにお会いして色々近況をお聞きしお互いに声をかけ合って頑張ってねと励ましあった懐かしい思い出もあります。

昭和36年の豊橋市の全日本軟式大会のダブルスで優勝して思ったことは、どんな大会でも勝ち進んでいくのには、心のバネと強い意志と精神力だと思います。国体代表連続9回出場しましたが東京での国体の時に父キトクの電報を受け取り出場を断念しました。昭和33年から4年連続で全日本硬式選手権のランキング第7位、第10位となりました。卓球をやってきて本当によかったことは友達がいっぱいできたことと何よりも手紙のやりとりを通じて心のつながりが出来たことです。高校2年生の旭川市での国体の帰りに層雲峡を見学、近くを流れている石狩川の大きさと自然の織りなす光景や兩館の夜景のすばらしさに大いに感動しました。トラピスト修道院の鐘の響きわたる海辺の黄昏時はほんとうにロマンチックで旅行だったらいいなあとしみじみ思ったりもしました。

今も心に焼きついている思い出の一つに札幌市でのインターハイに宿泊した旅館のご主人が、朝早くアイヌの部落までわざわざ木彫りの親子の熊を買ってきて福島に帰る私に記念のプレゼントされ、とても感激しました。インターハイで決勝まで行って2位になったのを可愛想だといって励ましてくれた

時は、本当に人の心のあったかきを感じさせられた思いです。帰って来てからお礼の手紙を差し上げましたが、その熊をみる度、当時の情景が走馬灯のように浮かびます。青函連絡船に乗ること5時間退屈しなかったのは船の廻りをイルカがいっぱい泳いでいました。船に乗っているお客さんが食べものを与えるので寄って来たのです。みんな楽しい思い出ばかりです。

卓球を志していらっしゃる皆さん頑張って下さい。大会の成績も大切なことと思いますが何によりも精神面を鍛えることが大事だと思います。卓球をやって来て良かったと今振り返ってみて思うことは、精神面の強さと周囲にまけない根性がうえつけられた様な気がします。絶好調ばかり続くわけもなくスランプもあります。その中から抜け出すのも自分自身の気力だと思います。負けずに練習を重ね自分のため福島の卓球のため前進あるのみです。

最後になりましたがこの記念すべき70年史に原稿執筆の依頼を受けました事は大変光栄に存じております。心から感謝申し上げますと共に福島県卓球協会並びに会長さん始め関係者のみなさま方のみまますのご発展とご活躍をお祈り申し上げます。



「卓球は不滅」

橋 本 義 一

ここ何年か卓球王国であった日本がどうしたわけか金メダルがとれなくなって久しい。日本の選手も一生懸命にやっているのだが、中国の選手のように死にもの狂いでやっているところのチームには勝てない。

一生懸命と死にもの狂いで、後者が勝つに決まっている。

私の持論で恐縮だが、東京オリンピックを境に、日本のスポーツは、もう勝てないと思った。日本は、裕福になり過ぎたのである。あの時、新聞、雑誌、テレビは、こぞって大和魂を、悪者扱いをしていた。スポーツは、苦しい猛練習よりも、楽しく練習することが、正しい練習方法となったのである。このことについて、良いとか悪いとか言うことは毛頭ない。

たしかに現在、スポーツは隆盛をきわめ、生涯スポーツ、高齢者スポーツなどと言われるように、国民総スポーツマンの時代である。これがスポーツの歴史なのかもしれぬ。

私は学生の頃、東京に住んでいたが、母の実家が田村郡の三春にあったので、地元の田村高校に、よくコーチに行った。

部員達は、よく私のスパルタ式指導に、ついてきたと思う。この甲斐あって、県大会でも、団体戦では、上位入賞を果たし、又個人戦にいたっては、何人かは、優勝、準優勝をしているはずだ。

その後、いわき市に居住し、たくさんのすばらしい卓球関係者や選手にめぐり逢えたことは、本当に幸せだった。

その頃、協会から頼まれ、平商業高校を指導するようになり、ずい分夜遅くまでしごいた。

遠い所から通って来て乗り継ぎのバスがなくなる生徒もいたが、その子は、「歩いて帰ります。」と言って、練習を決してやめなかった。ある日、練習の途中から雨が降り出し、やむ気配がないので、練習後、この女生徒を送っていった。驚いたことに、あたり一面の真っ暗闇の山道、痴漢が出るというよりも、山賊が出るような所である。歩けばたっぷり30～40分はかかる。この環境が、彼女を強くさせたのだろう。さすがに県大会では優勝して、インターハイに出場している。

他にも、多くの選手を育ててきたが、もう私の指導方法は、通用しないだろう。うさぎ跳びグランド10周、うで立て100回などの号令がとぶ練習風景は、いまはあまり見られなくなって来ている。しかし私には、それらをもくもくと、こなしていた部員達の姿が、今でも目に浮かぶのである。

今、振りかえると、100校以上に及ぶ、卓球の指導は、私の青春そのものだったような気がする。

卓球を通じての人との出会い



根本 裕子 (旧姓 佐藤)

私が卓球と出会ったのは、尚英中に入学して、友達に誘われたのがきっかけでした。当時の私は卓球のタの字も知らなかった時です。顧問は佐藤二男先生でした。伝統のある中学校で、上手な先輩が沢山いました。練習は、毎日がフォア打ちの連続でしたが、一度も休まず練習にうちこみました。しかし、残念ながら、良い成績は残せませんでした。

相馬女子高に入学した時は、迷わず卓球部に入部しました。西郷徹夫先生の御指導のもとで伝統もあり、先輩達の残したすばらしい成績のある学校でした。厳しい基礎トレーニングとともに先輩後輩の間の厳しさには、びっくりしました。最初の頃は、練習についていくだけで精一杯でしたが、ボール拾いから始まり、初めて台について練習できた時は、とてもうれしく思いました。ミスをするとな竹の棒でおしりをたたかれるたび、この次こそはと思いながらがんばったことが心に残っています。西郷先生には、基礎をしっかり教えて頂きましたが、残念なことに、次の年に先生が転勤になってしまい、とてもこのときが貴重な一年でした。二年生でキャプテンとなり、相女の伝統を守らなくてはという思いから、浜名コーチを始めとする皆さんに支えられ、とにかくがんばりました。全員で必死に練習に励んだ結果、昭和50年のインターハイ県大会での団体優勝、また、ミニ国体出場という思い出をたくさん作ることができました。

卒業後、東亜栄養（トアエイヨー）に入社し、ここでも伝統に押しつぶされそうになりながら、加藤監督や勘野さん（現監督）、諸先輩方に支えられながら、なんとか成績を残すことができました。実業団全国3位（4回）、県総体個人戦に3年連続優勝し、優秀賞を頂いたことが私にとっての一番の思い出です。トアエイヨーでの8年間は、とにかく練習をしました。加藤監督には、今のままでは、試合に勝てないと言われ、まるっきりフォームをかえていただきましたが、なかなか思うようにいかず、毎日泣きながら練習を続け、自分との戦いに明けくれました。なんとか、県でチャンピオンになりたという一心から、早朝、昼休み、夜と卓球づけでした。仕事をしている時でも、いい作戦がうかぶとよくメモをしておいたものです。お蔭様でいろいろな大会で勝てるようになりました。トアエイヨー時代もいろいろな人に支えられ、すばらしい経験ができました。

子供がお腹にいた時以外は、ずっと卓球づけの毎日でした。現在長男が中一、長女が小五で富久山卓球クラブ、深谷秀三先生のもとで親子共々お世話になっており、365日練習の毎日で、卓球が生活の一部となっています。深谷先生が出している会報には、昔よく言われたことが書かれており、納得することがたくさんあります。また、先生の卓球への情熱には、頭の下がる思いです。

私は、現在家庭婦人でも活動していますが、周りには、影山さん初め、暖かい人達が多くとても楽しくプレーをしています。卓球を始めて以来、すばらしい指導者にめぐりあい、その中でいろいろ学び、友人にも恵まれ、本当に良かったと思うばかりです。今後子供達も卓球を通じ、すばらしい経験を経て良い人生を送ってくれればと思います。今まで出会えた人達と私に好きなことを存分にさせてくれた両親、家族に感謝したいと思います。ありがとうございました。



学長にほめられて

伊藤 二郎

50年位前、安達中学（現安達高校）の体育館に師範学校（現福島大学）の卓球部の選手が練習試合にきました。キャプテンだった私は誰にも負けなかったようで、師範に入るようすすめられました。

当時は中学5年で専門学校を受けるか、新制の高校3年生へ進むか、同級生がみな迷っている時代でもありました。戦争が終わったばかりですが野球・卓球

が盛りで、卓球をやりたい思いで、福島師範を受験しました。

入学式直後に体育館に呼ばれ、早速卓球部員として練習し、翌月5月東北の師範、青年師範学校の東北大会が青森の弘前市で行われました。昔から青森は卓球県として全国で有名でした。

団体戦は決勝で青森に敗れ準優勝でしたが、個人戦では前年優勝の青森師範の三上という人を1年生の師範に入って2ヶ月目の私が敗って、新人の私が個人優勝ということになりました。試合が終わり学校に戻ってからすぐに、学長室に呼ばれ、栗原学長（後の県教育長）がにこにこした顔で、東北大会個人優勝おめでとう、と言われ、その時はうれしい気持ちでいっぱいでした。

福島師範としては、その年の全国大会出場は、女子バスケットと、卓球個人の私の二種目だけだったようです。

師範学校2年の時、国では現在の高校3年から新しい大学の制度が出来ましたが、9月に師範生も高校3年生（同級生）と大学受験をし、旧福島経専と旧福島師範が一緒になり、福島大学の中の経済学部と教育学部が誕生しました。

当時、東北では東北大学、東北学院が強く、私はダブルスで2、3位、シングルで5位で、全国大学選手権に出場しました。

教員時代も卓球の指導にあたり、一応の成果をおさめ、また福大卓球部の後輩を応援しようと、深谷先生方のご尽力で福島大学卓球会が結成され、私が会長に推され、発展に努めております。

学生時代、教員時代、退職後も卓球にかかわり続いているのも、栗原学長のあの笑顔と、おめでとうの言葉によるものと、感慨を深くしております。



第8回 東北地区大学総合体育大会

団体準優勝 単・複 優勝成る！ 1955.6.19

高橋 敏夫

《団体戦》 福島大学校対抗戦主メンバー

- ・渡辺 敏郎 福高
- ・高橋 敏夫 福高
- ・西郷 徹夫 相馬高（現県卓球協会長）
- ・村上 長一郎 岩手

上記のメンバーが主となって出場し、運よく勝ち進み、準優勝することが出来た。その時は、今のように1部・2部などの制度がなく、すべてオープン参加出会った。4名の特徴を生かし、オーダーで工夫し、一丸となって勝ち取った。感激の余り、目の前がボーッとかすんだのを覚えている。

《個人戦》 種目 男子ダブルス

準優勝 渡辺・高橋 組 1955. 6. 19 東北選手権大会

優勝 渡辺・高橋 組 1955. 6. 29 東北総合体育大会

優勝 渡辺・高橋 組 1956. 6. 29 東北総合体育大会

私達は、2連覇することができた。それは、練習の結果だと思うが、「なぜできた」と問われれば、理由は3つあると思う。

その1. サービスで主導権をとり、攻撃的に進めたこと。そのためのサービス研究を多くしたこと。

その2. お互いにサインなしでもプレイできたこと。状況に応じてどう対応するか考え方が一致していたこと。台から離れず、前迅速攻型でタイプが似ていたこと。

その3. 福島県大会等で、何度か優勝し、経験が豊富であったこと。などが考えられる。

《個人戦》 種目 男子シングルス

優勝 高橋 敏夫 福大
準優勝 渡辺 敏郎 福大

ダブルスを一緒に組んでいる敏郎さんと、東北大会で決勝戦になるとは夢にも思わなかったが、現実となり、お互いに、やりにくかったのを覚えている。結果は、3-2のフルセットで決着が付いたが、内容はどちらが勝っても不思議ではなかった。

《道のり・忘れられない出逢い》

その1. 1年生のとき初めて東北大会に出て、岩手大の藤井さん（カット主戦・後に、全日本強化選手）と対戦した後、「カット打ちがうまいですね。」とほめられたことである。いくら打っても守備範囲が広く、壁に打っているような感じで、完全に参っていたのが実情であったのに……。

その2. 渡辺敏郎さんとの出逢い。

野球部の4番バッターで当たればHRというすごい人物である。メジャーのソーサ選手の様子がかったりした体格で、反射神経、動体視力、持久力ともにすばらしかった。一緒に練習を重ねお互いに切磋琢磨した。

その3. 関東学生選手権で、野平選手（後に世界第3位）とフルセットで敗退したこと。今でも一球一球が目に見え、敗因は、フットワークの差と、七色の変化サービスでなく三色のサービスだったかもしれない。

その4. 全日本選手権で、渋谷選手（カット、後に全日本監督）との試合の時、バックへ決めたはずのボールが返って来たり、最高のストップをすると、逆サイドへバックでスマッシュされたり、手も足でなかったことを思い出します。単に守るだけでなく攻撃のできるカットマンの時代へとようになってきたと思った。

その3. 福大の卓球練習場も旧から新体育館となり、明るく、広くなって良かった。柔道の針金先生のお姿や、空手糸東流の面々、一つ屋根の下で汗をかけたことが忘れられない。

毎日が卓球だったことがあの青春の日々が、私の宝である。



青春時代

片 桐 寛（旧姓 日下）

私は、どうやら「福島大学学芸学部」に入学したのではなく、「福大卓球部」に在籍したのに違いないと考えています。

とにかく講義に出席した時間より、体育館にいた時間の方が長かったような記憶が強いのです。

初年度は、床の抜けそうな、埃だらけの古い体育館、向こうの方では空手部が練習していました。雨漏りがしたこともあり、それでも結構楽しく過ごしていましたが、明るくて広い、ピカピカの新体育館に移った時の嬉しさははっきりと思い出されます。

国立大学としては当時の福大卓球部は強かったのではないのでしょうか。特に女子は、男子の先輩はじめ部員の方々と一緒に練習したので力をつけることが出来たようです。練習が辛いと思ったことなど一度もなく、今もただ懐かしい思い出ばかりです。団体戦の決勝で2-2になって、さあ、と緊張した時、相手チームからの「5番目の選手がいないので、これで辞退します。」との申し出にビックリしたこともありました。全国大会では早々と負けてしまいましたが、萩村はじめ当時の世界レベルのそうそうたる選手の妙技を見ることが出来、今思うととても贅沢な経験をしました。

東京でも大阪でも、遠征は夜行列車で何時間もかけて行きました。新幹線や飛行機で移動する現代から見たら全くのんびりしたものでした。

東北代表（昭和29年東北学生卓球選手県大会 シングルス優勝）になった時は、たった一人の女の

子の遠征の引率（用心棒？）に、大先輩が二人も付き添って下さって、心丈夫なことでした。

大学の駅伝大会には、卓球部は「あすなろ」チームとして参加、優勝したように覚えています。とにかく、いい人々に恵まれて、ひたすら楽しく過ごし、あれこそが青春時代だったと確信しています。

ちなみに、当時のダブルス“イノチカ”コンビの相棒“イノちゃん”とは、今に至るまで長ーいおつきあいが続いており、これも福大卓球部のおかげと感謝しております。

魅せられて



田 中 滋 子（旧姓 猪瀬）

あれからもう四十数年が経っていたと、いま改めて思う。十代から二十代にかけての、人生の中のあの短い年月を青春というなら、福大卓球部に在籍した時期は、まさに青春の凝縮された時間だったと思う。

子どもの頃から卓球に馴染み、卓球が好きであったのに、卓球というものに本気で付き合ったのは、福大に入ってからである。すでに高校で選手として活躍していた、わが相棒のチカちゃん（現片桐寛さん）に連れられて、体育館を覗いた。

まだ古い体育館の頃でかなり歴史の刻み込まれた建物であり、空手部やフェンシング部と共同で使っていた。隅の方に小さな更衣室があった。

部員の方々はそれぞれ個性的で楽しい面々であった。温かい雰囲気がいつもあり、何とも居心地のよい場所となった。放課後といわず、休講の空き時間も殆ど毎日体育館に通ったものである。

初心者の私はいつか卓球に魅せられ、卓球部の空気に魅せられ、そしてのめり込んでいった。臆面もなく数々の試合に出させてもらって、当然のことながら、卓球が生活の中の大きなウエイトを占めることとなった。チカちゃんとダブルスを組むことになり、シングルスとは別な愉しみを知った。足手まといであったろう私を、チカちゃんはよくリードして下さった。そして部員の皆さんが温かく指導して下さったと思う。チカちゃんとは、寮で寝食を共にしていたから、いつも一緒に、まさにイノ・チカコンビ（旧姓猪瀬）であった。

狭いテーブルにネットを張り、小さなボールを打ち合う。ただそれだけの中に、一つの世界がある。相手の心の動きや感情が微妙に伝わってくる。それがおもしろい。そして十分汗を流した後の爽快感は、何ものにも代え難いものがある。

ついにダブルスで東北大会優勝があり、東日本大会、全日本学生選手権大会にも出場できた。第一シードの組との対戦では無我夢中。勿論初戦敗退であったが、当時日本の第一級の人たちとプレーできた興奮は、今も鮮やかに心に残っている。

福大での、卓球に魅せられて過ごした、大いなる時間と空間、そこには喜びがあり、苦しみがあり、そして自分との葛藤でもあった。何よりも、卓球を通じて、得難い人たちにめぐり会えたことを心から感謝している。